

吉蔵の法華経観

奥野光賢

1. はじめに

本稿は、本年(2004年)8月6日から8日まで、カナダ・トロント大学(University of Toronto)において開催された第6回国際法華経学会(The 6th International Conference on Lotus Sūtra)⁽¹⁾の発表原稿を、本紀要の編集委員の了解を得て、一部省略改稿してここに掲載しようとするものである。

学会発表原稿では、その冒頭で近年のわが国における吉蔵の法華経関係注疏に対する研究史を概観したが、この部分については別稿でも論及することにしたので今回は省略することとした。本稿にはこれまでの私自身の見解の再論が多く、そうした意味では新鮮味に乏しいとの譏りは免れ得まいが、しかし私の意見を要約して提示できる機会も少ないので、あえてここに公表することにした次第である。前記、学会発表もそうした意図からなされたものであり⁽³⁾、その点を読者諸氏にはあらかじめお断りしてご理解をたまわりたい。

2. 吉蔵の法華解釈の特色と最近の研究上の問題点

吉蔵の法華経関係注疏に対する研究はこれまで数多く報告されているが、諸学者が一致して指摘するところによれば、吉蔵の法華経関係注疏撰述の最大の目的は、梁の三大法師の一人である光宅寺法雲(467-529)が著したとされる『法華義記』8巻を凌駕することにあつた。吉蔵は『法華玄論』巻第1で、梁の三大法師に言及し、

爰至梁始三大法師碩学。当時名高一代。大集数論遍积衆経。但開善以涅槃騰誉。莊嚴以十地勝鬘擅名。光宅法華当時独歩。(T34.363c)

と述べて、こと法華経の研究に関しては、ひとり法雲が群を抜いていたと嘆じている。

吉蔵によれば、法雲の法華経研究の最大の特色は、従浅至深の原理によって体系化された慧観(生没年不詳)等の南北朝時代の五時教判に拠って、涅槃経は「仏身の常住」と「仏性」を明かしているが、法華経にはいまだそれらが説かれていないの

で、法華経は涅槃経と比較すると価値的に劣ると結論した点にあった。これに対して吉蔵は、法華経にも涅槃経と同様に「仏身の常住」と「仏性」が説かれていることを主張して痛烈に法雲を批判し、法雲を批判・超克することによって、自らの法華経観を開陳しようとしたのである。吉蔵が法華経にも「仏身の常住」と「仏性」を明かしていることを論証する際、重要な論拠として依用したものの一つに、世親造『妙法蓮華経憂波提舍』（以下『法華論』と略す⁽⁶⁾）があったところから、私はこれまで吉蔵の『法華論』依用の問題を中心に研究を進め、一昨年それらの成果をまとめて『仏性思想の展開 吉蔵を中心とした『法華論』受容史』（大蔵出版、2002）として公刊した。

『法華論』はインド成立とされる現存唯一の法華経に対する注釈書といわれるもの⁽⁸⁾で、その本文中には涅槃経の「一切衆生悉有仏性」を思わせる、

菩薩記者。如下不輕菩薩品中示現。応知。礼拝讃歎作如是言。我不輕汝。汝等皆当。得作仏者。示現衆生皆有仏性故。（T26.9a）

という記述があるところから、これまで一般には「如来蔵・仏性思想」を高揚した書と見なされてきた。事実、法華経に「仏身の常住」と「仏性」を読み込もうとした吉蔵もそのような立場から『法華論』を依用したことはすでに述べた通りである。

ところで、『法華論』は上記のように「皆有仏性」を主張しつつ、一方には、
声聞有四種。一者決定声聞。二増上慢声聞。三者退菩提心声聞。四者応化声聞。二種声聞如来授記。謂応化者。退已還発菩提心者。若決定者増上慢者二種声聞。根未熟故不与授記。菩薩与授記者。方便令発菩提心故。（同前・9a）

という有名な「四種声聞授記」に関する記事があり、この記事をめぐる後世さまざまな議論がなされたことは広く知られるところである。⁽¹⁰⁾

この「四種声聞授記」の問題に関して、高崎直道氏は次のように述べる。

ここで明らかに、世親が『法華経』の授記説のうち 如来蔵 思想を読みとっていたことを知るのである。ただし、それに続けて、声聞を四種に分類して、（1）決定声聞、（2）増上慢声聞、（3）退菩提心声聞、（4）応化声聞を挙げ、前二者は根未熟で授記せられないとするのは、なお、三乗各別の説にひかれていますものごとく見える。⁽¹¹⁾（下線部＝奥野）

かかる高崎氏の見解を踏まえ、「唯識派の一乗思想」や「如来蔵思想」に対して鋭

い考察を加えられた松本史朗氏は、⁽¹²⁾「一切衆生悉有仏性」をいういわゆる「如来蔵・仏性思想」とはけっして「一切皆成」を保証したのではなく、むしろ「三乗各別説」（＝一分不成仏説）と何ら矛盾しない論理を用意するものであると主張して学界に大きな衝撃を与えた。松本氏は前の高崎氏の見解を受けて、「悉有仏性説」が「三乗各別説」と矛盾しない具体的例証が『法華論』に見られるとされ、⁽¹³⁾また末光愛正氏の説を受けて「悉有仏性説」が「一分不成仏説」に矛盾しないより具体的例証が『法華論』に依拠してその法華解釈に如来蔵仏性義を持ち込んだ吉蔵の思想に顕著に見られるとして、吉蔵の思想を厳しく批判している。⁽¹⁴⁾

さて、松本氏が評価される末光愛正氏の研究とは、「吉蔵の成仏不成仏観」と題する氏の一連の研究である。⁽¹⁵⁾私の理解するところによれば、末光氏がこの研究をなされた当初の目的は、慈恩大師基（632-682）の『法華玄賛』の撰述が天台の法華注疏に対する対抗意識からなされたとする従来の説に異議を唱え、『法華玄賛』と吉蔵の法華注疏の引用関係から見て、⁽¹⁶⁾『法華玄賛』に見られる基の学説は吉蔵の思想を発展継承したものであるということを中心として主張しようとした点にあったものと思われる。すなわち、末光氏は前の論文において、『国訳一切経』の『法華玄賛』の解題者布施浩岳氏の説を批判して、次のように主張している。⁽¹⁷⁾

㉑ 別に三論至上を主張する訳ではないが、三論と法相の思想的影響関係は存在するのであろうか。少なくとも『法華玄賛』と『法華義疏』の論文の内容により、引用関係は論証出来、影響関係を論じる前提条件は揃えた。そこで両者の間に、思想的な共通点はあるかどうか、次の議論の内容となって来る。『玄賛』の解題者は、法相の「五姓各別」思想も、天台家に対する対抗意識の強烈な一例としている。法相の「五姓各別」の様な完成されたものではないとしても、吉蔵の思想の中にも基本的な骨子としての五姓各別思想的なものを見出すことが出来る。⁽¹⁸⁾（下線部＝奥野）

㉒（前略）この為、灌頂示寂の年に慈恩が生れたからと云って、慈恩が成立年時不明な天台疏を見たと言う根拠にはならない。解題説が成立するには、少なくとも玄賛が天台疏を参照したと云う明確なる証拠が必要である。それから初めて、慈恩は天台家に対抗意識を働かしたか、或は吉蔵の思想を継承したかが議論されるのであって、現時点においては、三論の影響を受け継いでい

ると考えた方が、より理に適っている。この様な根拠不明な天台至上主義とも受けとれる従来の固執観念は、この際見直すべきである事を、『法華文句の成立に関する研究』は提示している。従来は、「無二亦無三」の解釈が、法相と吉蔵では同一である事のみが指摘されていた。しかし今回、法相の「五姓各別」という重要な内容も、吉蔵の思想中に基本的にあることが論証できた。⁽¹⁹⁾

（下線部 = 奥野）

そして末光氏は一連の論文中において、一貫して吉蔵の著書中においては法華経のいう「五千起去の増上慢」と「決定声聞」は常不軽菩薩によっても授記されることがなく、したがっていかにしても成仏の機会がないことを繰り返し主張しているのである。⁽²⁰⁾

確かに基が吉蔵の法華注釈書を参照していることは事実であり、私もこれを全面的に肯うものであるが、⁽²¹⁾しかしだからといって吉蔵に基のいう「五姓各別思想」の先蹤となるような思想があったのか否かについてはいましばらく議論が必要であろうと思われる。なぜなら、それはこれまで吉蔵をいわゆる「一乗家」と見なししてきた研究史に対する変更を迫るものだからである。

末光氏が永遠に成仏の機会がないと判定された「五千起去の増上慢」と「決定声聞」はいずれも『法華論』の「四種声聞」に関わるものである。そこで私はそれらの声聞の吉蔵著書中における扱われ方を検討して、末光説に疑義を呈したのであった。⁽²²⁾ここではその詳細について紹介する余裕はないが、疑義を呈するにあたって私がその大きな論拠の一つとしたのが「四種声聞授記」に関する吉蔵の『法華論疏』の次の記述である。

菩薩与授記。從菩薩記者已下。第二釈疑。菩薩授記者方便令發菩提心故。疑者云。若増上慢声聞仏不与受記者。不軽菩薩何故通二人与之受記。釈云。仏就根熟未熟。故与記不与記。菩薩約二種義故。所以与記。一者如前明有仏性故得与授記。二者方便令發菩提心故与授記也。

問。若爾仏何故不依二義通授此四種人記。

答。以菩薩例仏義亦得也。（巻下、T40.819a）

ところで最近、『法華論』に対する詳細な訳注研究を発表された藤井教公・池邊宏昭の両氏は、問題となる『法華論』の「四種声聞授記」に関する箇所を次のように

現代語訳し、さらに末光氏と私に上記のような意見の相違があることを承知された上で、これに注記して次のように述べられた。いま藤井・池邊氏の現代語訳とその注記をそれぞれ㉟、㊱としてこれを示そう。

㉟声聞の人が授記を得ると言うが、声聞には四種ある。

一には〔小乗に〕定まっている声聞、二には思い上がった声聞、三には菩提心から退く声聞、四には菩薩が応現化作した声聞である。

〔このうち〕二種の声聞には如来は記別を授ける。すなわち、応現化作した者と、菩提心から退いたが、再び菩提心を発した者とである。〔小乗に〕定まっている声聞と思い上がった者との二種の声聞は、機根が熟していないので授記を与えないのである。〔不軽〕菩薩が〔機根の熟未熟に関係なく誰にでも〕授記を与えたというのは、方便によって〔授記を与えた相手に〕菩提心を発させるためである。（下線部 = 奥野）⁽²³⁾

㊱吉蔵は次のように注釈している。

「疑者云。若増上慢声聞仏不与受記者。不軽菩薩何故通二人与之受記。釈云。仏就根熟未熟。故与記不与記。菩薩約二種義故。所以与記。一者如前明有仏性故得与授記。二者方便令発菩提心故与提記也」(『大正蔵』第四十巻、八一九頁上)すなわち、如来は相手の機根を見て授記を与えたり与えなかったりするが、菩薩は相手の機根に関係なく、菩提心を発させるために方便として授記を与える、ということである。（下線部 = 奥野）⁽²⁴⁾

上記の藤井・池邊両氏の解釈は、かつて私が提示した見解と同様、『法華論』そしてそれを注釈した吉蔵の解釈も、常不軽菩薩はいかなる声聞に対しても授記を与えるという理解であろうと思われる。したがって、議論の最終的帰趨はともかくとしても、客観的に見て私の反論もまったく的はずれのものではなかったし、また無意味なものでもなかったことがご理解いただけるものと思う。^(補注1)⁽²⁵⁾

3. 「五千起去の増上慢」に対する解釈をめぐって

さて、法華経は「方便品」以後、「五千起去の増上慢」に関しては一言も触れていないところから、後世この「五千人」の扱いをめぐってさまざまな議論がなされることになったことは周知の通りである。⁽²⁵⁾ところで、近時『法華経入門』(岩波新書、

2001)を著された菅野博史氏は、この「五千起去の増上慢」について、次のような興味深い見解を提示された。^(補注2)

これら五千人がその後どのように救済されるのかについては、『法華経』は言及していない(五百弟子受記品において、釈尊は迦葉に対して、『法華経』の集會に不在の声聞も成仏できることを彼らに伝えるよう命じている)。中国天台宗の智顛は『法華経』の後に説かれた大乘の『涅槃経』において救済されたと考えたが、これは直接『法華経』とは関係のない話である。仏教は衆生の救済に関して、誰でも最終的には必ず救われるというきわめて楽観的な救済観をもっている。仏教には永遠の地獄という考えがないことにも、その楽観性はよく現われている。したがって、この五千人も何らかの仕方では救われるはずであり、彼らを救済からあくまで排除するという考えは毛頭なかったはずである。(下線部 = 奥野)⁽²⁶⁾

記述後半の下線部分はひとまず措くとして、前半部分の記述は「五千起去の増上慢」に対しては「五百弟子受記品」において一つの配慮が示されているのではないかとの菅野氏の意見の表明であろうと思われる。そこで以下では、菅野氏の示唆に従い「五百弟子受記品」に対する吉蔵の解釈を一瞥して見たい。

まず最初に菅野氏の指摘する「五百弟子受記品」の原文を確認しておこう。菅野氏の指摘する文とは、「五百弟子受記品」偈文中の次の記述である。

迦葉汝已知　五百自在者
餘諸声聞衆　亦当復如是
其不在此會　汝当為宣説 (T9.28c)

(迦葉よ、汝は已に、五百の自在の者を知れり。余の諸の声聞衆も亦、当にまたかくの如くなるべし。その此の会に在らざるものには、汝は当にために宣説すべし、と。)

岩波文庫本『法華経(中)』は、「此の会」に注記して、

この説法の會座にいない声聞にも皆、迦葉をして代って説かしめて授記すること。このことは、勸持品に「われ先に、総じて一切の声聞に皆已に記を授くと説けり」とあるによって明らかであると注釈されている。(下線部 = 奥野)
(p336-337)

といている。この注記が天台の『法華文句』の解釈を受けたものであることは明らかである。すなわち、『法華文句』巻第8上「釈五百弟子受記品」には次のようにある。

問。但見五百得記。不見千二百。

答。此五百即千二百数。頌中末後一行半。總授七百故是千二百也。又持品云。我先總記一切声聞皆已授記。即指今一行半。非是止授七百声聞也。（T34.106c）

経は「この説法の会座にいない声聞」といい、『文句』はこれを「勸持品⁽²⁷⁾」を引いて「一切の声聞」と解釈しているのであるから、常識的に考えれば「説法の会座にいない声聞」に「五千起去の増上慢」も含まれると見るのは至極当然のことであると思われる。『文句』が「是れ止だ七百の声聞に授くるのみに非ざるなり」と述べているのもそうした解釈を補強するものであろう。

では、吉蔵は問題の「五百弟子受記品」の一文をどのように解釈しているのだろうか。『法華義疏』には次のようにある。

迦葉汝已知下第三段命迦葉令宣記。以無有二乘唯有一乘。一切声聞皆当作仏。
（巻第9「五百弟子受記品」、T34.580b）

短い記述ではあるが、ここで「一切声聞皆当作仏」と述べられている意味は、私にはきわめて重いものがあると思われる。さらに『義疏』のすぐ後文では、経の「悔過自責」（T9.29a）以下を釈して、次のようにいっている。

悔過自責下第四發言自叙領解。又開為四。一悔過自責。二述於昔迷。三叙今悟。四者解釈。悔過自責者懺悔小乘有所得罪。令未改二乘執者因此而改已發大乘心者牢固不退。然此經始終寄千二百人破十方三世一切諸小乘人。令其捨有所得悟入平等正觀。乃至寄三根人破斥十方三世封執大小乘二見菩薩。亦令悟入非大非小不一不三無依無得妙悟。是以此經始終皆用千二百人為言端耳。寄此人執迷以頭大小有所得迷。託此人悟引一切有所得大小迷心悉令得悟也。（T34.580b）

すなわち、ここでは千二百人に事寄せて十方三世の一切の諸の小乘人を破し、それら小乘人に有所得を捨てて平等正觀に悟入させること、および千二百人に事寄せて一切の大小の有所得を破斥して、ことごとく一切の大小の有所得人に悟りを得させることが強調されていることがわかる。ところで、「五百弟子受記品」は法華七喻の一つである「衣裏繫珠（衣裏宝珠）」の喩を説くことでも知られているが、これに

関連して『法華統略』には「宝珠」を示すことの意義について、次のように述べる箇所がある。

示珠者。破凡迷排聖惑。令悟中道直登一極理也。讚歎珠者。勸一切衆生。發菩提心。一句染神歷劫不朽也。（巻下本、Z43.66b）

つまり、ここでは「宝珠」を讃嘆して「一切衆生に勸めて菩提心を発こさせる」ことが強調されているのである。したがって、上記の一連の記述から知られることは、吉蔵にはすべての人びとを例外なく悟りに導くという明確な意志があったということである。しかもそれは前に見た天台のそれとも共通した理解に立つものと思われるのである。⁽²⁸⁾万が一「一切」といいつつ、そこに例外を設けているとすれば、それは「言葉の詐術」としかいえないであろう。吉蔵がいわゆる「一切皆成」を志向した仏教者なのか、あるいは慈恩大師基のように「一分不成仏説」を容認した仏教者であるのか、あるいはまたはその両者を会通する仏教者であったのかを確定することは、吉蔵の法華経観、そして彼の仏教思想を考える上で極めて重要な問題であるはずである。それゆえ、今後も私なりにこの問題に対する考究を続けていければと願いつつ、本稿を終えることにしたい。

注

- (1) これまでの国際法華経学会に関しては、今回の学会にも参加して発表された大谷大学のロバート・F・ローズ（Robert F. Rhodes）教授に次のような報告がある。ロバート・F・ローズ「第四回国際法華経学会に参加して」（『仏教学セミナー』第67号、1998年）。なお、今回の学会には本学からは仏教学部の吉村誠氏も参加され、「中国唯識における『法華経』の位置 一乗の解釈を中心に」と題して発表された。
- (2) 拙稿「三論宗」（岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』大蔵出版、収録予定）
- (3) 残念ながら欧米においては、三論学派・三論宗に関する研究は意外と少なく、またその関心もけっして高いとはいえないというのが実情である。そのような状況の中、発表の機会を与えて下さった、今回の学会のコーディネーターであるポール・グロナー（Paul Groner）教授には心からの感謝の気持ちを捧げたい。
- (4) 今日の学界では、『法華義記』は法雲の講説をその弟子が筆録したものとするのが一般的である。菅野博史『法華義記』（法華経注釈書集成2、大蔵出版、1996年）p20. 参照。
- (5) 『三論玄義』に「宋道場寺沙門慧観仍製経序。略判仏教凡有二科。一者頓教。即華嚴之流。

吉蔵の法華経観（奥野）

但為菩薩具足顯理。二者始從鹿苑終竟鵠林。自淺至深。謂之漸教。於漸教內開為五時」（T45.5c）とあるを参照。

- (6) この点に関する古典的論文として、横超慧日「法華教学における仏身無常説」（『法華思想の研究』平楽寺書店,1971年に再録、雑誌論文初出は1937年）がある。また横超論文を受けた最近の成果としては、菅野博史「仏性・仏身常住の問題と中国法華思想」（『法華経の出現 蘇る仏教の根本思想』大蔵出版,1997年に所収、雑誌論文初出は1984年）がある。
- (7) 『妙法蓮華経憂波舎』には菩提留支（?-527）訳（T26.No.1519）と勒那摩提（生没年不詳）訳（T26.No.1520）の2本がある。2本は細部において字句の異同が見られるが大綱においては概ね一致している。なお、本稿では留支訳を用いる。
- (8) 『法華論』には前注（7）の2種の漢訳しかなく、サンスクリット本もチベット訳も現存していないところからインド成立を疑う学者もいる。
- (9) このほか『法華論』には、「如来蔵」「仏性」に関する次のような記述がある。
- 五者無量種成就説不可尽。如經舍利弗唯仏と仏說法諸仏如来能知彼法究竟實相故。言実相者。謂如来蔵法身之体不變義故。（T26.6a）
- 二者同義謂諸声聞辟支仏法身平等。如經欲示衆生仏知見故出現於世故。法身平等者。仏性法身無差別故。（同前.7a）
- 三者法身平等。多宝如来已入涅槃。復示現身。自身他身法身平等無差別故。如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別。不知彼此仏性法身悉平等故。（同前.8c）
- 三者示現法仏菩提。謂如来蔵性淨涅槃常恒清涼不變等義。如經如来如実知見三界之相次第乃至不如三界見於三界故。（同前.9b）
- 三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如来蔵故。（同前.9b）
- 無有生死若退若出者。謂常恒清涼不變義故。亦無在世及滅度者。謂如来蔵真如之体。不即衆生界。不離衆生界故。（同前.9b）
- 法力如經所知。其心決定知水必近者。受持此經。得仏性水成阿耨多羅三藐三菩提故。（同前.10a）
- (10) 例えば、伝教大師最澄（767-822）と徳一（生没年不詳）のいわゆる三一権実論争などもそうした例の典型と見なすことができよう。
- (11) 高崎直道『如来蔵思想の形成 インド大乘仏教思想研究』（春秋社,1974年）p419。
- (12) 松本史朗「唯識派の一乗思想について 一乗思想の研究（ ）」（『駒澤大学仏教学部論集』第13号,1982年、p305-294（横））および松本史朗「如来蔵思想は仏教にあらず」（『印度学仏教学研究』第35巻第1号,1986年、後に松本『縁起と空 如来蔵思想批判』大蔵出版,1989年に再録）を参照。

- (13) 松本氏は前注(12)の論文「唯識派の一乗思想について」の注(40)において、「一切衆生悉有仏性」とか「一切衆生如来蔵」というテーゼがあったとしても、筆者は単にそれだけでは、それを一乗眞実説とは呼ばない。何故なら、この二つのテーゼと「一切衆生は成仏し得る」というテーゼは、必しも同一ではないからである。先の二つのテーゼは、例えば、『法華経論』やMSA, k.37にも見出しされるが、この二つの唯識派の著作が三乗眞実説を説くことは、本稿によっても解明されたであろう」と述べている。なお、松本氏の『法華論』に対する理解は、氏の英文論文、Shiro Matsumoto “Buddha-nature as the Principle of Discrimination”(『駒澤大学仏教学部論集』第27号,1996年)で次のように手際よく要約されている。

Thus, I think, we can reach the following conclusion :

The thesis that “ all sentient beings possess Buddha-nature ” or that “ all sentient beings are tathāgatagarbhas ” is not contradictory to the notion that “ there are some people who can never attain Buddhahood. ”

If this notion is common to the texts advocating Tathāgatagarbha thought, we cannot but consider the thought to be inevitably discriminatory.

In order to validate the arguments above, we will investigate the Tathāgatagarbha thought in the commentary on the *Saddharmapuṇḍarī kāsūtra* by Vasubandhu, i.e. the *Saddharmapuṇḍarī kopadeśa* (Taisho No. 1519, No.1520), extant only in Chinese translation.

First of all, it should be noted that the text admits the thesis that “ all sentient beings possess Buddha-nature ” (Taisho, 26, 9a). However, this commentary also states the Yogācāra theory of “ the four kinds of śrāvakas ” (Taisho, 26, 9a 15-19).

According to the theory, the śrāvakas are divided into two groups, i.e. those who have been predicted by the Buddha to attain Buddhahood and those who have not been predicted by the Buddha to attain Buddhahood. Thus, it follows that this text, while asserting the thesis that “ all sentient beings possess Buddha-nature, ” admits, at the same time, the thesis that “ there are some people who can never attain Buddhahood ” (p317)

- (14) 松本氏による吉蔵の思想に対する批判については、松本史朗「法華経と日本文化に関する私見」(『駒澤大学仏教学部論集』第21号,1990年)および「三論教学の批判的考察 dhātu-vādaとしての吉蔵思想」(平井俊榮監修『三論教学の研究』春秋社,1990年、後に松本『禅思想の批判的研究』大蔵出版,1994年に再録)を参照。
- (15) 末光愛正「吉蔵の成仏不成仏観」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第45号,1987年)を参照。

吉蔵の法華経観（奥野）

以後この論文は第10論文まで書き継がれている。末光氏の上記の一連の研究を要約した論文が、末光愛正「吉蔵の法華経観」(平井俊榮博士古稀記念論集『三論教学と仏教諸思想』春秋社、2000年)である。「吉蔵の成仏不成仏観」(2)～(10)の掲載誌については同論文を参照されたい。

- (16) 末光愛正「法華玄賛と法華義疏」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第17号,1986年)を参照。
- (17) 布施浩岳「妙法蓮華経玄賛解題」(『国訳一切経』「経疏部4」)を参照。
- (18) 前注(15)末光論文、p276.
- (19) 同じく前注(15)末光論文、p290.
- (20) 前注(15)に示した、末光愛正「吉蔵の法華経観」を参照。
- (21) 基の『法華玄賛』に限らず、慧沼(650-714)の『法華玄賛義決』も吉蔵説を引用している(T34.859a以下、引用される吉蔵の著作は『法華遊意』T34.634a以下)。なお、最近の基における吉蔵説引用に關説した論文としては、橘川智昭「慈恩教学における法華経観」(『仏教学』第44号,2002年)を参照。
- (22) 拙著『仏性思想の展開 吉蔵を中心とした『法華論』受容史』(大蔵出版,2002年)の特に第1篇第3章「吉蔵の声聞成仏思想」を参照していただきたい。
- (23) 藤井教公・池邊宏昭「世親『法華論』訳注(3)」(『北海道大学文学研究科紀要』第111号,2003年)p35.
- (24) 前注(23)藤井・池邊訳注p36.
- (25) 田村芳朗・藤井教公『法華経(上)』(仏典講座7、大蔵出版,1988年)では、「この五千人の扱いをめぐって、後世、教学上種々の解釈が行なわれる。例えば、天台教学においては、これらの五千人は今の法華経の説法の直接の対象(当機)ではなく、その後に説かれる追説追混たる涅槃経によって済度されるとする」(p137)と注記している。
- (26) 菅野博史『法華経入門』(岩波新書,2001年)p126.
- (27) 『法華文句』中に引かれる「持品云」とは、『法華経』巻第4「勸持品」に「橋曇弥。我先総説一切声聞皆已授記」(T9.36a)とあるを指す。
- (28) 吉蔵の『法華義疏』における「五千起去の増上慢」の解釈と天台の『法華文句』における解釈がきわめて類似したものであったことは、前注(22)の拙著、特にp140-143を参照されたい。

(補注1)

末光氏と私の主張の相違を、私の責任において要約しておけば、次のようになる。今後この問

題に論及して下さる方は参考にさせていただき、ご教示ご批判をお願いしたい。

①末光氏は、「吉蔵の場合には、常不軽菩薩が授記する対象の中に、五千の増上慢や決定声聞は含まれないと解釈」される（前注（15）に示した、末光愛正「吉蔵の法華経観」p151参照）。その理由は「五千の増上慢」は法華の会座にいないからであり、「決定声聞」は「定性」のような存在だからである。

末光氏の論拠は『法華玄論』巻第7（T34.421c-422a）および『法華義疏』巻第8（T34.566a）の記述である。……②

②私は、①に示された末光氏の見解の一部妥当性を認めつつも、それが吉蔵の声聞成仏思想を判断する絶対的基準とはなり得ず、吉蔵には「五千の増上慢」も「決定声聞」も常不軽菩薩によって授記が与えられるとする立場があったことを主張している。

私が論拠とするのは、本文でもふれた『法華論疏』巻下（T40.819a）の記述と『法華義疏』巻第11（T34.616b）および『法華遊意』（T34.642a-b）等の記述である。

③慈恩大師基は、「増上慢声聞」（当然この増上慢には「五千の増上慢」も含まれると私は理解する）にも「決定声聞＝趣寂の声聞」も常不軽菩薩によって授記されるが、「決定声聞＝趣寂の声聞」には先天的に「大乘の姓」がないので（補注*）、授記されたとしても成仏することはない。したがって、私見によればこの点に吉蔵との大きな相違があるのであり、吉蔵と基の「声聞成仏観」は基本的に大きく異なるものであると判断される。

上記のように私が主張する根拠とする文は、『法華玄賛』巻第1本（T34.652c-653a）の記述である。

（補注2）

菅野氏以前にこの「五百弟子受記品」の記述に着目した先行研究として、ジーン・リーヴス（Gene Reeves）「『法華経』と宗教的寛容」（竹内整一・月本昭男編『宗教と寛容 - 異宗教・異文化間の対話に向けて』大明堂、1993年に所収）があることを、菅野氏ご本人より直接ご教示いただいた。記してその学恩に感謝したい。

（補注*）

この点に関し、前注（22）の拙著『仏性思想の展開』第1篇第3章「吉蔵の声聞成仏思想」中で、「つまり、この『法華玄賛』の文によれば、基は「趣寂の声聞」（＝決定声聞）でも「増上慢声聞」でも「理姓の因」はあるので、常不軽菩薩はこれらの声聞にも授記すると理解していたことは明らかである。ただ、基はそれらの声聞には先天的に「大乘の姓」がないので、（常不軽菩薩に記を与えられたとしても）成仏することはないといっているのである」（p114）と述べたが、

吉蔵の法華経観（奥野）

先天的「大乘の姓」がないのは「趣寂の声聞」(＝決定声聞)だけであり「増上慢声聞」は含むべきではない。ここに、拙著の不正確な記述を謹んで訂正しておきたい。この点、前注(21)に紹介した橘川智昭「慈恩教学における法華経観」中の次のような記述は正確なものである。

「菩薩授記は、常不輕菩薩品において、常不輕菩薩が「我れ敢へて汝等を軽しめず。汝等皆当に作仏すべし」といって礼拝行をなしたことをさす。『法華論』では菩薩授記の義は衆生に皆仏性あることをいうものとされ、基はそうした仏性の意も生かしながら漢訳を解釈し直したと思われる。基によれば、増上慢の声聞は、凡夫でありながら第四禪を得て阿羅漢に達したと思ひこんでいる凡夫であるから、後に廻小向大し得るはずであり、その根未熟の故に如来は授記しないが菩薩が具因記をなす、漸に発心させ大乘の修行を行わせようとするためである、また趣寂の声聞(定性声聞、決定声聞)は、大乘の姓無く(無大姓)、根未熟の故に如来は授記しないが、菩薩はそのような声聞でも授記する、それは理姓因があり大乘を信じさせ不愚法ならしめるためである、『法華論』の訳者はこの二種の声聞を区別せず、一処に根未熟と訳しているという。『玄賛』は同じ解説を譬喩品でもくりかえしており、基にとってこれは重要な関心事であったといえる。」(同論文、p32。下線部＝奥野)

なお、いささか弁解がましいが、私も橘川氏と同様の見解を承知していたことは、前掲拙著p160の注記(46)を参照していただければ幸いである。橘川論文はきわめて示唆に富むもので、大いに啓発を受けた。また、東アジア仏教研究会平成16年度第2回定例研究会(2004年10月2日、於駒澤大学246会館)で橘川氏は「三乗説と大乘」と題して口頭発表された。来年度の同研究会誌に掲載されるであろう氏の論稿もあわせて参照されることを望みたい。

(第6回国際法華経学会発表原稿を一部省略改稿して補注を加筆する。)

(2004年11月11日)